100円からのCD批評 Pops VOL.4

マークポイント	＜評価＞
●	安くても買って損した
●●	どうでも良い
●●●	まあ、いいんじゃな〜い
●●●●	かなり満足できた
●●●●●	非常に満足、してやったり！

＜16＞ロック

・Bobby　Caldwell
[SOUL　SURVIVOR]
500円
{SINDOROME/1995年発売　アメリカ盤未開封}　柏にて

70年代後半から80年代に流行ったAORの立役者・ボビー・コールドウェル。AORの波が去った後も相変わらずのこの人は相変わらずのパターンでやっているのが偉い。バブル時期には、あれだけバリバリだったこの人のアルバムも最近は中古ショップの定番となりつつある。来日公演に行ってみたら、思ったほどショーマンシップがなく、地味なステージで貧相な男が歌っていたという印象が残っている。しかし、このアーティストはとり作った他のAOR系歌手と違ってこのCDでも聴かれるR&Bへの憧憬・コンプレックスみたいなものが、自作に大きな影を与えていた事がわかり、それなりの必然性が感じられるのが良い。[WALK ON BY][YOUR PRECIOUS LOVE][PROMISE]などソウルスタンダードも改めて彼のボイスによって、自作曲みたいになるから不思議である。ということは逆説的だが、オリジナルで目指していた自分の世界がソウルの世界とは似て非なるものであったのにようやく気づいたので、そのオマージュたるアルバムを作るに至ったのではないか。こういった彼にとって、このアルバムこそ＜魂の生存者＝原点たるブルーアイドソウル＞に成りたくて成れなかったアーティストの自己証明に他ならない。　同様な事例はマイケル・ボルトンで、そのアルバム「タイムレス」はこれと全く同じ位相のもの。 満足度／●●●　　（購入日時／1997.12）

＜17＞ロック

・Robben　Ford [TALK TO YOUR DAUGHTER/トーク・トゥ・ユア・ドーター] 180円 {WARNER/1988年発売　日本盤}　　秋葉原にて

元LAエキスプレスのギタリストで、知る人が知るロベン・フォードが88年にリリースしたブルース中心のアルバム。LAエキスプレスでの存在感の無さは、この人は器用であってもフュージョン向きでないというコトを示していたが、収録曲全部がブルースではブルース小僧たるR・フォード面目躍如であろうと思い購入。「悪い星の下に」とか「NOTHING BUT BLUES」などお馴染みのブルースナンバー。ブルースに詳しくないコチトラがこういった曲想に抱くのは、CREAM時代のクラプトンのプレイ。それと比較してしまうあたりがつらい！　まあ、ロック好きにはちょっとオールド・テイストだし、ブルースファンにはインチキ臭くて聴けないという中途半端な位置にあるアルバム。その辺りが結局弱いところで、ゴリゴリに突っ張ったコンセプトで作ったアルバムは、何年かたつと再評価されたりして強い場合がある。しかし、ちょっとでも俗受けを狙ったブルースロックは、クラプトンクラスになると今更といった感じでブルースアルバム出してもそれなりに評価されて売れちゃうのに、これがR・フォードは発売から10年以上たつと時代の波にさらせれてしまう。可愛そうなものですが、その趣きだけが70年代ロック好きだったギターオヤジ向きのCD世界。　満足度／●●●　　（購入日時／2001.1.8）

＜18＞フュージョン

・Larry　Carlton　& Lee　Ritenour [Larry & Lee] 500円 {GRP/1995年発売　日本盤}　　柏にて

かつてのフュージョン界２大立役者たる、ギタリストが共演したのも時代の為せる技。若かった2人もだいぶ禿あがってきて、フュージョン下火でオヤジ再会の図。往時はライバル的存在としてシーンを盛り上げ、不仲説をあおって儲けたジャーナリズムもこのアルバムには冷淡。当たり前とも思うが、世はフュージョンを通り越してコンフュージョンの時代。オールドファッションになってしまったフュージョンオジサンたちも張切りました。　ここではかつてのバリバリにギターを弾きまくって姿は少なく、２人がそれぞれ書いた作品をリラックスしながら語り合っている姿がほほえましい。うるさいくらいの弾きまくりテクのリトナーが成長したというか、少し静かに「ギターフレーズで唄う」姿勢が感じられて好感がもてる。アコースティックの比重が大きく関係しているようでもある。　かつてのギターファンの派閥～リトナー派よりもカールトン派の方に身を置く当方として、こうしたアルバムは懐かしくもあり、かつ嬉しくもありの１枚です。　満足度／●●●　　（購入日時／1998.8）

＜19＞ロック

・Sting　[MERCURY FALLING]　300円　{A&M／1996年日本盤}　松戸にて

スティングのわりかし地味めなアルバムである。アルバム「ブルータートルの夢」あたりのスティングが強烈な印象であって、ここでのスティングは良く言えば円熟して来たのか、すこし物足りない感じで聴いた。B・マルサリス、K・カークランドといったお馴染みメンバーよりもマイナーなミュージションをバックに多用し、若干トラッド系、アコースティックな部分を表わしている。角が取れたというか、突っ張った感性よりも地に近い声を大切にして、メロディメーカーぶりは相変わらずである。カントリーテイストやアイリッシュ・トラッド、おまけはフランスの歌まで加え、落ち着き、暖かさを自然に出そうといったアプローチは、やはりいかにもインテリタイプのミュージシャン。　歌詞の内容（訳詞を対照しているのだが）も、従来型の問題意識を訴えるのとは違って内面に踏み込んだり、直接的ではない｛しなやかな挑戦｝をテーマにしているように受けとれる。オトナになったスティング。 満足度／●●●　（購入日時／1999.8）

＜20＞ポップス

・Jose　Luis　Perales「アメリカ／AMERICA」400円　{EPIC／1992年国内見本盤未開封}　高田馬場にて

え〜、のっけから告白すると、スペインのポップスがチイ〜とも面白いと思わない当方が、何を血迷ったかスペインのシンガーソングライター／ホセ・ルイス・ペラレスのCDを買ったのも、未開封盤であった事とタイトル「アメリカ」が気になったの2点。スペインポップスは現地でかなり聴いたつもりだが、ホントに琴線に全く触れもしなかった。大仰に歌い上げる割にメロディが中途半端で、中南米の音楽に見られる心地よい旋律があるでなし、リズミカルでないノッペリした思いこみのロマン精神が横溢していて好きでなかった。　でこのアルバムはどうかというと、僕の嫌いなスペイン歌謡の弱さを相変わらずペロンチョと露呈している。タイトルコンセプトたるアメリカ（ラテン）を意識した数曲が救い。自分でも不思議だが、同じスペイン語圏で本国スペインの音楽が面白く感じず、ラテン音楽と一線を画すのはイベリア半島という位置と風土の為せる技か、ヨーロッパの残滓が少しでも残っている為か、定かではない。…などと理屈を付けても、他の人から見りゃラテンの曲もスペインポップスも両方ベタベタして甘ったるいと感じるであろう。奇妙だが、個人レベルでは全く違うのである。　満足度／●●　（購入日時／1996.9）

CD LiST